2026年2月15日（日）　12章　2歴36章

創造から新天新地へ―24章でたどる神の救済史
12章　「帰還の命令」
歴代誌第二36章

1. はじめに

（1）これまでの流れ

①創造 （創1章）
②堕落（創3章）
③アブラハム 契約（創12章）
④出エジプト（出12章）
⑤ 荒野での律法付与（出20章）
⑥約束の地の征服（ヨシ1章）
⑦ダビデ契約（2サム7章）
⑧王国の崩壊（2列25章）
⑨受難のしもべの預言（イザ53章）
⑩新しい契約（エレ31章）
⑪終末の王国（ダニ7章）

（2）今回は2歴36章を取り上げる。

① ヘブル語聖書（タナハ）の配列
＊律法（トーラー）―預言者（ネビイーム）―諸書（ケトゥビーム）
②その最後が「歴代誌第二36章」であることは偶然ではない。
③キリスト教旧約（マラキ）と、ユダヤ正典の終わりは異なる。
④重要な問い
＊なぜイスラエルの歴史は「滅亡」ではなく「帰還の命令」で終わるのか。
＊なぜ裁きの書が、希望のことばで閉じられているのか。

旧約聖書で啓示された神の約束は、新約聖書に引き継がれる。
2歴36章の要点は、そのことを教えている。

Ⅰ．王たちの霊的堕落（1～16節）

1. 連続する不従順

（1）ヨシヤ以後の王たちは、例外なく【主】の目に悪を行った。

①エホアハズ
②エホヤキム
③エホヤキン
④ゼデキヤ

（2）指導者・祭司・民が一体となって堕落していく。

①14 節

2Ch 36:14 そのうえ、祭司長全員と民も、異邦の民の忌み嫌うべきすべての慣わしをまねて、不信に不信を重ね、主がエルサレムで聖別された【主】の宮を汚した。

2. 神の忍耐と拒絶

（1）預言者の派遣

①【主】は「早くから、たびたび」預言者を遣わされた。

②しかし民は、神の使者を嘲り、みことばを軽んじ、預言者を侮った。

（2）裁きは突然ではなく、拒み続けた結果であることが強調される。

①16 節

2Ch 36:16 ところが、彼らは神の使者たちを侮り、そのみことばを蔑み、その預言者たちを笑いものにしたので、ついに【主】の激しい憤りが民に対して燃え上がり、もはや癒やされることがないまでになった。

Ⅱ．神殿崩壊と捕囚（17～21 節）

1. 神殿の破壊という神学的衝撃

（1）神の臨在の象徴である神殿が焼かれる。

①19 節

2Ch 36:19 神の宮は焼かれ、エルサレムの城壁は打ち壊され、その高殿はすべて火で焼かれ、その中の宝としていた器も一つ残らず破壊された。

（2）これは単なる国家滅亡ではなく、契約破棄の結果である。

①シナイ契約破棄

②土地の契約とダビデ契約は依然として有効。

2. 安息年の回復

（1）捕囚の 70 年は、「地が安息を取り戻すため」（21 節）。

①レビ記 26 章の契約上の呪いの成就

②21 節

2Ch 36:21 これは、エレミヤによって告げられた【主】のことばが成就して、この地が安息を取り戻すためであった。その荒廃の全期間が七十年を満たすまで、この地は安息を得た。

（2）歴史は偶然ではなく、契約の枠組みの中で進行している。
①490 年÷7 年＝70 年
②王国時代の総年数であるが、象徴的数字でもある。
③バビロン捕囚は 70 年で終わる。

Ⅲ．歴史の転換点（22～23 節）

1．異邦の王を用いる【主】

（1）22～23 節

2Ch 36:22 ペルシアの王キュロスの第一年に、エレミヤによって告げられた【主】のことばが成就するために、【主】はペルシアの王キュロスの霊を奮い立たせた。王は王国中に通達を出し、また文書にもした。

2Ch 36:23 「ペルシアの王キュロスは言う。『天の神、【主】は、地のすべての王国を私にお与えくださった。この方が、ユダにあるエルサレムに、ご自分のために宮を建てるよう私を任命された。あなたがた、だれでも主の民に属する者には、その神、【主】がともにいてくださるように。その者は上って行くようにせよ。』」

（2）バビロンではなく、ペルシア王キュロスが登場する。
①彼は【主】によって「奮い立たされた」と記される。
②解放命令の内容
＊エルサレムに上れ。
＊神殿を再建せよ。
＊【主】がともにいてくださるように。

2．ここで物語は「終わり」ではなく、「始まり」で終わる。

（1）旧約聖書と新約聖書を分断してはならない。
①聖書を読む際には、歴史的背景と文脈を考慮に入れる。。

Ⅳ．新約聖書への橋渡し

1．「帰れ」という命令の未完性

（1）神殿は再建された。
①ゼルバベルによる建設。これが第二神殿である。
②しかし、栄光は完全には戻らない。
③ヘロデ大王による拡張は物理的なもの。

（2）ダビデの王座も回復していない。

2. 第二神殿期の期待
   （1）民は待ち続ける。
      ①メシア
      ②栄光の回復
      ③真の解放

3. 新約の冒頭との連結
   （1）マタ 1 章は「ダビデの子、アブラハムの子」から始まる。
      ①歴代誌が閉じた問いに、新約が答え始める。

   （2）キュロスの命令は、キリストによる真の解放の影である。

結論：今日の信者への適用

1. **神の裁きは、突然ではなく、拒み続けた結果として来る。**
   （1）私たちの時代も同じである。
   （2）聖書の警告、良心の声、歴史の教訓がある。
   （3）神は忍耐深い方であるが、今の状態が永続することはない。

2. **神殿は壊れても、神のご計画は壊れない。**
   （1）神殿の崩壊は、「神の臨在の終わり」に見えた。
   （2）神が敗北したのではなく、神が主権をもって裁かれたのである。
   （3）教会の衰退や社会の価値観の混乱は、神の敗北ではない。
   （4）むしろ、神が新しい段階へ導かれる前兆である場合がある。

3. **神は、異邦人・世俗権力すら用いて御心を成し遂げられる。**
   （1）神は、異邦の指導者、世俗の出来事をも用いて、救済史を前進させる。

4. **真の回復は、地理的帰還では完成しない。**
   （1）捕囚からの帰還は実現したが、栄光は不完全であった。
   （2）環境、制度、組織だけでは、人は本当に回復しない。
   （3）バビロン（世）から神の召しに応答して立ち上がるかが問われている。

5. **旧約は「未完」で終わり、新約がその答えを示す。**
   （1）歴代誌は、「次を待て」という終わり方をしている。
   （2）私たちはすでにメシアを知っているが、完成はまだ先にある。
   （3）このシリーズは救われただけで満足している人たちへの挑戦である。